

たんぽぽのなみだ



1. おばあちゃんとおさんぽ

その日、けんいちくんは

きれいなお花がたくさん咲いている

広い広い野原にあそびにやってきました。

もちろん、大好きなおばあちゃんもいっしょです。

初夏のさわやかな風が、けんいちくんのほほを

やさしく くすぐりながら通りすぎていきます。

そのたびごとに、早くもたねをつけた気の早いたんぽぽたちから

ちいさなちいさな 「いのち」 たちが

大空に舞い上がっていくのです。



2. ちいさな「いのち」たち

おばあちゃんといっしょに土手にすわって

目の前のお花畑をながめていたけんいちくんは

ふと足元に、たねをつけたたんぽぽを見つけて、

かおを近づけ、思い切り息を吹きかけてみました。

その小さな「いのち」たちは、

そのしゅんかん、先を争うように

風に乗って飛び立っていきました。

しかし、よく見てみると、どうやら出遅れた

ひとつぶのタネが、しっかりとしがみついて

残っていました。



3. ひとつ残ったタネ

けんいちくんは、もう一度、今度は

ありったけの力をこめて息を吹きかけてみました。

それでも、まだそのタネは、がんこに飛び立つことをせず、

ただ風にゆれていました。



「はっはっは。どうやらその子は、まだ

お母さんのそばを離れたくないらしいねえ」

そばで見ていたおばあちゃんが

急に笑い出しました。そして、

とってもやさしい笑顔でこう言いました。

「けんいち。そっとしておいてあげなさい。

その子もやがて旅立つときがくるんじゃないから。」

4. おばあちゃんのおはなし

「はい。」

けんいちくんは、元気良くそう答えました。

けんいちくんの返事をにこにこしながら

聞いていたおばあちゃんは、

ふと、思い付いたようにこう言いました。

「じゃあ今日は、たんぽぽについての

お話をしあげようかねえ。」

「わーい。やったあ。」

けんいちくんはそんなおばあちゃんのお話を

聞くのが大好きなのです。



5. 小さな山のうえで

しばらくの間、お花畑を見渡すようにして

じっとだまってながめていたおばあちゃんは、

やがてぼつりと話しはじめました。

「それは、おばあちゃんがまだ小さかったころのお話なんじゃが、

むかしはあのあたりに小さな山があって、

毎年春になると、たくさんのお花が咲いて

それはそれはきれいな景色だったんじゃよ。」

「へえー、あっちにおともだちのおうちがあるけど、

どこにも山なんてないよ。」

けんいちくんは、首をかしげながら言いました。



6. 山がなくなるとき

「うん。その山は毎年たくさんのお花が咲いて

とってもきれいな所だったんだけど、

ある年の夏、その山を平らにして

大きなビルを建てることになって、

たくさんの土がトラックで

海岸のうめたて場に

運ばれていったんだ。

お花たちはみんな海におぼれて

いのちを落としてしまったけれど、

その山の最後の土を運んだトラックが

町のまん中の大通りを走っているとき

少しだけ土がこぼれて、その中で眠っていた

ひとつのタネが、やがてその道路のわきで

芽を出したのさ。」

「へえーっ。でもそのタネ、きっとびっくりしただろうね。

土の上に顔を出したら

いきなり横を自動車が走ってんだからね。」



7. 道路のすみで

「そうだね。道路のすみで芽を出したそのタネは、
ビルの谷間からわずかに射し込む太陽の光を浴びて、
車の排気ガスが混ざった汚れた空気を吸って、
アスファルトの上のわずかな土に根っこを広げて
精いっぱい生きていったのさ。
そして、その次の年の春、小さな黄色の花を
咲かせることができたんだ。」



「わあい、やったあ。」
けんいちくんはうれしくなって、
大きな声を出して喜びました。
そのお話はまだまだ続きました。

8. 小さなチョウチョが

「ある日小さなチョウチョが飛んできて、
そのお花の上にとまって羽を休めていたの。

《こんな所にお花が咲いているとは思わなかった。
向こうの野原まではまだまだありそうだから、
この辺でみつを飲ませてもらってひと休みするか。》

そう言いながらそのチョウチョは、お口を伸ばして
おいしそうにそのお花のみつを飲んでいたんだ。



9. はじめてのお友達

《ねえ、チョウチョさん。あなたはどこに
行こうとしているのですか？》
はずかしがりやのそのお花は、はじめて来てくれた
お友達に、思い切ってそう声をかけてみたんだ。

《いや、この道をずっと登っていった所に
とっても広い野原があるって聞いたんだ。
なんでも、お花がたくさん咲いていて、
とってもきれいな所だって聞いたので、
これからちょっと行ってくるところなのさ。》

チョウチョのお話を聞いたそのお花は、
どうしてもその野原へ行ってみたく
なっちゃったのね。



10. 野原に連れてって！

《ねえ、どうか私もその野原に連れて行って

くれないかな。》

《だめだよ。君は足手まといになるだけだもん。

第一、君は空も飛べなければ、

土の上を歩くことさえできないじゃあないか。》

そう言ってそのチョウチョは飛び立ち、

道路の上を野原に向かってヒラヒラと飛んで行ったんだ。

そのお花はくやしくて、でもどうすることもできない自分が悲しくて、

何日も何日も なやんでいたんだ。

だけどある日・・・



《よしっ、歩いてみるわ。

思い切って、歩いてみる。》

そう決心したそのお花は、土の中にのばしていた

片方の足を、恐る恐るゆっくりと地面の上に出してみたのさ。

・・・すこし、めまいがして怖かったけど、それでも勇気を出して

もう片方の足も地面の上に持ち上げてみたんだ。

生まれてはじめて自分の足だけで完全に

地面の上に立ち上がった彼女は、

土の中からとっていた栄養分が絶たれ、

胸に少し苦しさを覚えたんだ。



12. 急がなければ・・

《急がなければ。》

そう思って彼女は、
道路沿いにチョウチョが飛んで行った方角へ
野原を目指して歩き始めたんだ。

のどがかわいても土の中からお水を飲むこともできず、
おいしい空気を吸いたくても
車の排気ガスで胸は苦しくなるばかり。

彼女は一步一步 歩くたびに体がおとろえて行くのを
感じながら、それでも自分自身をはげまして、
いっしょうけんめい歩いたんだ。



13. お花屋さんの前で

かなり歩いた所に、道路に沿って小さなお花屋さんがあったんだ。

《やあ、君。そんな所で一体どうしたって言うんだい？》

お花屋さんの店先の一番前で白くて美しい花を咲かせたランの花が

不思議そうにそうたずねて来たの。そこでその黄色い花は、

《この向こうに広くてきれいな野原があるって聞いたから、

どうしてもそこまで行きたくて…》 と、正直に答えたんだ。

《何もそんなに苦しい思いをしてそんなとこまで

行くことないじゃないか。

僕たちなんて人間に育ててもらって、おいしい肥料を

毎日食べさせてもらえるし、

寒くはないか、暑くはないかっていつもいつも

気を遣ってもらって、

それはそれは幸せな毎日だよ。

もっとも、君のようなみずぼらしい花なんて

誰も育ててはくれないだろうけどね。》

ランの花はそう言うと大声で笑ったんだ。

回りにいたバラやユリの花もその話を聞いて笑ってた。

黄色いその花はくやしくて、急いでその場を離れたんだ。



14. その坂の向こうに・・・

《今に見てなさい。野原まで行って、おいしい空気をいっぱい吸って、
世界一きれいなお花だって言われるようになってみせるわ。》

黄色いお花は、そう言ってさらに歩き続けたんだ・・・。

それからずいぶん経って、一步一步が彼女にとって

本当につらく、苦しく感じられてきた頃、

前の方から一羽のチョウチョが飛んできたんだ。

それは、この前のチョウチョさんだったんだ。

《やあ、この間のお花さんじゃないか。

なんだか苦しうだけど、どうしたの？》

そのチョウチョもびっくりしてそうたずねたんだ。



《ああ、あなあはこの間の・・・。

実はあなたにこの先の野原のことを聞いて、

どうしてもそこに行ってみたくなくて・・・。》

その黄色のお花にとって、もう口をきくのさえ
つらくなっていたんだ。



《そうか、がんばれ、もう少しだよ。その坂を
登りきった所まで行くと、

遠くにその野原が見下ろせるんだ。》

15. 美しい野原が・・

そう言って、チョウチョもお花のことをはげましてくれたんだけど、
もうそのお花は体中がしびれてしまい、二、三歩歩くたびに倒れては
また起き上がって、・・もうそろそろ起き上がる力さえ、
無くなってしまいそうだった。

やっと坂の上についたとき、遠くに、見えたんだ。

あの、ゆめにまで見た美しい野原が。

広い平原に色とりどりのお花たちがいっぱい、いっぱい咲いてて、

そのお花が夢見た通りの野原だったんだ。

と、そのとき、後ろからたくさんのチョウチョ
たちが

その黄色のお花の上を野原の方向に飛んで行く
のが見えたんだ。

そのお花は自分の不自由さに涙を流して悲し
んだ。

・・でも、もうこれ以上歩くことは不可能だ
った・・。



けれどもそのお花には

まだやるべきしごとが残ってた。

彼女にとって、一生のうちにいちばん大切なしごと・・

そう、それは自分の子どもを世に残すこと。

でも、彼女は悩んだんだ。ここにタネを産んでも

またそのタネは、自分と同じように悲しい一生を歩んでしまうかも知れないと・・。

そのとき、そばで見ていたチョウチョさんが、見かねてこう言ったんだ。

《ねえ、ぼくのこの羽を使ってよ。この羽を少しずつほどいて、君の子どもたちに
つばさを付けてあげるんだ。》



17. 大空に向かって・・

それからそのお花は、黄色の花びらをちらしながらも、

けんめいに小さなかわいいタネたちをたくさん産んでいったんだ。

そしてそのひとつひとつにチョウチョの羽をほどいて編んだ、

小さな小さなつばさを付けてあげたんだ。

しばらくしてさわやかな、そして力強い初夏の風が

ぴゅーっ・・て吹いて、彼女の子どもたちを

いっせいに大空にさらって行ったの。

そのチョウチョもだいぶ羽をへらしてしまったけれど、

タネたちといっしょに大空に飛び立ったんだ。



18. ありがとうチョウチョさん

《ありがとうチョウチョさん。

わたしの子どもたちを見守って・・・あげて・・・ね》

そのお花は、もうほとんど力を使い果たして、

地面に横たわりながら、それでも最後のしごとを成しとげたうれしさと、

目からぼろぼろとなみだを流してそう言ったんだ。

そして小さくなっていく自分の子どもたちに向かって、

何度も何度も叫んだの。

《高く、遠くに飛んで行きなさい。

そして自分が一番気に入った場所に根をおろすのよ。

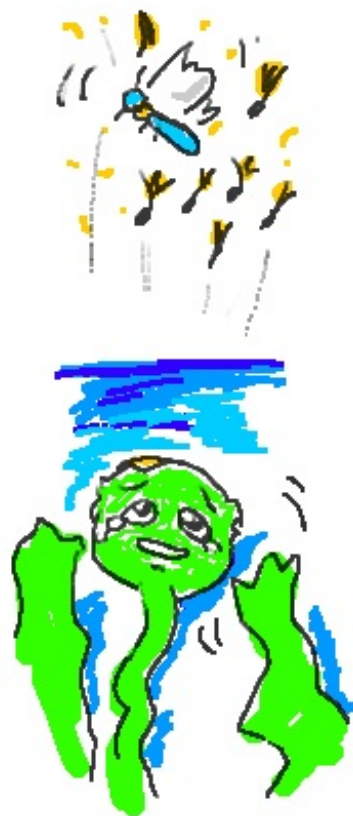
あなたたちは今、「自由」なのですから・・・。》

そのお花は、自分の子どもたちが芽を出す姿を見られないことを

ちょっぴり悲しみながら、

でもきっと広い野原できれいなお花を咲かせてくれるだろうと信じて、

タネたちが見えなくなっても いつまでも手を振って見送っていたんだ・・・。



・・・その黄色いお花の子どもたちが、

ここにいっぱい咲いているたんぽぽたちなんだよ。」

・・・話し終えてもおばあちゃんはしばらくだまって遠くを見つめていました。

けんいちくんは、目の前にあった小さなたんぽぽに目をうつして、

小さな声でつぶやきました。

「きみたちのタネには、そんな思いが込められていたんだ。」

そのとき、強い風が吹き、けんいちくんの回りにいたたんぽぽたちから、

いっせいにタネが大空に舞い上がりました。

お母さんに編んでもらったおそろいの小さなつばさを付けて・・・

けんいちくんは、またたく間に小さくなっていくそのタネたちに向かって、

「がんばれ、がんばって思い切り遠くに飛んでいくんだぞ！」

と、何度も何度も心の中ではげましていました。

